

【解説】

江戸時代の歌舞伎劇場は江戸町奉行の営業許可制でした。

その許可の証として劇場入り口には高く櫓を組み、興行主の紋を旗印として掲げるのです。だから、興行を開始することを

「櫓をあげる」と言います。そして、興行主の劇団と劇場を「座」と言います。

寛永元年（1624年）に猿蓑座が櫓をあげたのを皮切りに、各座は移転、改称、興行主の変遷を経て、正徳四年（1714年）には

中村座、市村座、森田座の江戸三座となります。時は流れて明治の世になり、森田座は新富町に移転して新富座と改称します。

明治十一年（1878年）に、新富座は西洋式の大劇場を新築しました。明治二十二年に今日の歌舞伎座が木挽町に櫓をあげる以前の話しです。

江戸の花見は武家でも商家でも一大行事です。その沸き立つ思いを掛けて、新富座では「元禄花見踊」をお披露目興行の演目に出しました。実際、この長唄曲では、三味線の「前弾き」と呼ばれるイントロは、軽快で心が躍るようなアップテンポの前奏で始まります。

チャラ、チャン チャン チャン チャン チャン チャン・・・

さざ浪や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

平 忠度

平家物語の「都落ち」に出てくる有名な歌です。「志賀の都」とは近江大津宮のことですが、その地の三井寺の背後にある

長等山は桜の名所でした。唄の出だしにある「志賀山」とは、志賀の都の、この山に咲く名高い桜を指し、桜前線を上ってくる

道筋は江戸への道、即ち東路（吾妻路）です。江戸が春になって、東海道を北上して志賀の都の桜がやってきたと云うわけです。

先達の解釈には、元禄時代に志賀山万作が創始した、歌舞伎舞踊の志賀山流の花見小袖の演出が、リバイバルとして上演されて、それが春を江戸に連れて来たとする説がありますが、筆者は

なかなか、そこまでは読み取れませんでした。

花見に着て行く小袖には、金糸、銀糸を編んだ金箔、銀箔のキラキラの布を縫い付けるのだから、目立ってしまっています。

伊達染とは、流行の派手な染め様のことで、

斧は「ヨキ」とも言い、「良き事を聞く」と、謎かけの文字を染め抜いた小袖を作る人もいて、まあ、それも全く「構わぬ」とする、ホントに思い思いに作っていて、ミテクレは立派なものだと

言っています。

更に、「かまわぬ伊達染」と、くくって詠めば、当時「町奴」という、町のヤンキー兄ちゃん達の間で流行った、「鎌〇ぬ」という模様のファッションを意味します。農機具の鎌と、丸の輪の文字と、「ぬ」の字を組み合わせたものですが、それも掛けてあります。今で云えば、「鬼滅の刃」のキャラクター、炭治郎や彌豆子が着ている、市松模様のようなノリです。

新調した小袖を着て、連れだつて花見にゆく若いお嬢さん達は、着ている袖を、楽しそうにバタバタ振って歩いているのでしょ

うね。袖は、普通は片袖が一尺五寸、両袖で三尺の長さの布を使います。それが二倍の六尺ですから、当時流行った「大振り袖」というやつでしょう。今も昔もファッションは、伸びたり短くなったりです。エッ、諸兄はミニスカが良いって？

ア、そう。

「しかも」とは、「あのさあ」とでも言う、別の話題に切り替える言葉ですが、「しか」は「鹿」でもあり、「鹿の子」と絞り染めの「鹿の子絞り」を掛けたシャレでもあります。鹿の子供には白い斑点があつて、かわいいですから、白い粒状に盛り上がった絞り染めの模様は人気でした。

岡崎女郎衆は名古屋の岡崎宿にいた、今ならキャバクラのお姉さん達ですが、なんで、離れた江戸に花見に現れるのでしょうか。

それはゴロ合わせなのです。歌舞伎見物客は舞台の三味線を聞いているわけですから、「オカザキジョロシユ」と聞けば、

ああ、三味線のお稽古で「岡崎女郎衆はよい女郎衆」と繰り返して弾くフレーズがあつたなああとピンきて、「クスッ」となるのです。

「八つ橋」の因柄は同名の、観光客に人気の京菓子のパッケージにもあるので、皆様、ご存知でありましょう。杜若が湿地に美しい紫の花弁を咲かせ、そこに渡した九十九折の橋の風景です。

その風景は三河の国、そう、岡崎宿がある場所なのです。

で、なぜ色っぽい女郎衆の裾に描くのか。

唐衣きつつ馴れにし つましあれば

はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ

これは伊勢物語第九段に出てくる歌であり、三河の「八つ橋」という場所が詠まれたものです。意味は、

着慣れた衣服のように慣れ親しんだ妻を残して来ているものだから、はるばる来てしまったこの旅は、悲しく切ないのです。

岡崎女郎衆は、そういう、男に想われる女ですと、八つ橋を引

き合いにしています。それを受けて、連れの女の子は

「あら、あなたの着物もお女郎さんの裾のように紫色だよ、色も濃いし」とひやかしています。

八つ橋の染め扱きは、岡崎、三河の国、八つ橋（地名）、紫色、と受けてくるのですが、どうして岡崎女郎衆は「鹿の子の絞り」を着ているのでしょうか。

東海道五十三次を江戸に下る東路（吾妻路）では、岡崎宿から次の大きな宿場は吉田宿です（現在の豊橋市中部にあつた）。

その宿場の飯盛女を詠った流行歌に、

吉田通れば二階から招く しかも鹿の子の振り袖が

とあるので（豊橋市美術館「東海道名所風景」資料より）、鹿の子絞りの着物は、フウソクの職に就く女達の定番であつたのでしよう。

まあ、客引きは大体、二階からですから、足がチラと見えるかも知れませんが。

旅人は下から「おう！ オネエちゃん」てな、具合です。

吉田宿皆 仰を向いて通るなり（同出の川柳より）

江戸から富士山は見える。その距離を街道筋に西国に伸ばせば、

丁度、浜松辺りです。室町將軍 足利義教が富士を見ようと下向した途次に、浜松で臥龍の様な松の下で酒宴を開きます。

將軍義教が富士を遙かに望み、「浜松の音は颯々」と詠った故事（浜松神宮 由緒書きより）から、後世に「ざざざざ」フレーズで踊る小唄が作られました。

浜松の松風は波音とともに「ざざざざ」と聞こえたのでしようね。土地の人々はこの松を「颯々の松」と言うそうです。

さて、長唄の後半は、女達の会話と男達の会話から成ります。

女性は今も昔もファッションと美貌とが話題に、そして男性は酒と女が話題になります。大筋は現代語訳の通りですので、二三の言葉についてのみ解説を施しましょう。

「花と月とは・」は両方とも美しさを競うのですから、暗に「あなたと、わたしのどっちが美しいと思う？」と、心の内の稽当てでしようね。

絞るときの「鹿の子の結い目」を、斜め45度に揃えた、少し大型の模様を「足田鹿の子」と云うのですが、和服を好まれる女性にとっては、名の通った銘柄ですよね。

昔は遊郭に通うときは顔を隠して行ったのでしようかね。諸兄がラブホに行くときはどうなんですか？

花見の酒宴では、豪快に飲もうよとも言っています。「和田酒盛の盃」と云うのは、浄瑠璃の演目に和田酒盛というのがあります。

月夜の晩の花見では、大旦那のお妻さんは、コスプレで行くようです。旦那の方は、ちよっとカッコ付けた出で立ちで、取り巻き連中と、まるで小町踊りように輪になって踊っていますね。

最後は興行主からのメッセージを唄に乗せています。

上野の花見ですから、將軍の菩提である「東叡」寺があります。ひっくり返せばエイトウですから、芝居口上を意味します。

当て字は「永当」で、長く舞台がヒットすることを掛けています。口上では、「えいという御来駕のほど願ひ奉ります」ぐらいは言つたでしよう。

今和三年三月十四日

大中臣正比呂 拙訳

※近松浄瑠璃に見る和田酒盛の活用法（言語社会 第二号掲載）

るので、男は嬉しいと言っております。ハイ。

「和田酒盛」のストーリーについては、深く述べませんが、

